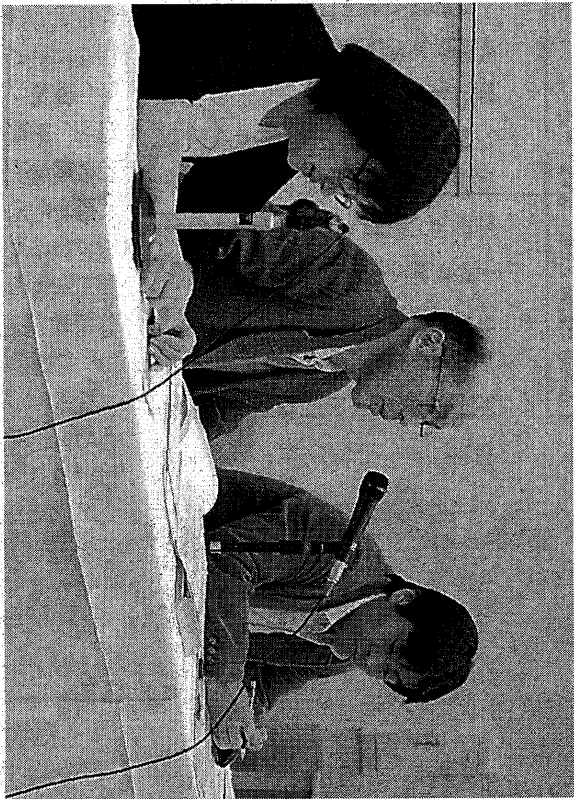


日韓の漂流・漂着民の動向について、研究成果を発表する大学院生と市民研究者ら



県立大大学院生と市民

県立の北東アジア地域研究（NEAR）センターが導人鮮からの漂着民を手厚くした市民研究員制度を利用し、大学院生と市民が取り組む共同研究の初の報告会が十日、浜田市野原町の同大であった。日韓、中外交史をテーマにした三題で、市民の知識や人脈を生かした調査研究が進み、地域開放型の人材育成を狙った同制度は、実り多きスタートを切った。

このうち、同市の郷土の石見と朝鮮の漂流・漂着民研究者・森和利勇さん、着民の動向について、国史院生との呉相美（オ）内外の資料を分析した。

・（中）さんは、近世 呉さんは、石見人が朝

日中韓 外交史テーマ

共同研究を初報告

鮮からの漂着民を手厚くもてなした様子を、朝鮮側の書物を引用して説明。森さんは、朝鮮に漂着した石見の船で、唯一記録に残っているのが、江津の「塩屋藤右衛門」の船だ」と報告した。

と大学院生の趙曉紅さんは、日本からの旧瀬州への開拓移民の医療衛生問題の研究。帰国者の自立指導員の三好さんの人脈で、日中の二十九人に聴取した。中国人の趙さんが質問者を務めたことで、反目感情の残る人の協力も得られ、双方の声を盛り込むことができた。

このほか、中国人留学生と、浜田市で環境活動を行う女性や、日本の環境外交の参選を説明した。宇野重昭学長は「ひとと味違う、ユニークな北東アジア学が生まれ、出されよう」と期待を寄せた。

浜田 人脈・知識生かし成果